

資料－ 9 主として縦書きに用いるくぎり符号の使い方

呼び名・符号	準 則	用 例
マル（。）	<p>一、マルは文の終止にうつ。</p> <p>正序（例 1）倒置（例 2）述語省略（例 3）など、その他、すべて文の終止にうつ。</p> <p>二、「」（カギ）の中でも文の終止にはうつ（例 4）。</p> <p>三、引用語にはうたない（例 5）。</p> <p>四、引用語の内容が文の形式をなしていても簡単なものにはうたない（例 6）。</p> <p>五、文の終止で、カッコをへだててうつことがある（例 7）。</p> <p>六、附記的な一節を全部カッコでかこむ場合には、もちろんその中にマルが入る（例 8）。</p>	<p>（1）春が来た。</p> <p>（2）出た、出た、月が。</p> <p>（3）どうぞ、こちらへ。</p> <p>（4）「どちらへ。」</p> <p>「上野まで。」</p> <p>（5）これが有名な「月光の曲」です。</p> <p>（6）「気をつけ」の姿勢でジーツと注目する。</p> <p>（7）このことは、すでに第三章で説明した（五七頁参照）。</p> <p>（8）それには応永三年云々の識語がある。（この識語のことについては後に詳しく述べる。）</p>
テン（、）	<p>一、テンは、第一の原則として文の中止にうつ（例 1）。</p> <p>二、終止の形をとつていても、その文意が続く場合にはテンをうつ（例 2 3）。</p> <p>ただし、他のテンとのつり合いの上、この場合にマルをうつこともある（例 4）。</p> <p>〔附記〕この項のテンは、言わば、半終止符ともいうべきものであるから、将来、特別の符号（例えば「シロテン」のごときもの）が広く行われるようになることは望ましい。</p> <p>用例の「参照一」は本則によるもの。また「参照二」は「シロテン」を使ってみたもの。</p> <p>三、テンは、第二の原則として、副詞的語句の前後にうつ（例 5 6 7）。</p> <p>その上で、口調の上から不必要のものを消すのである（例 5 における（、）のごときもの）。</p>	<p>（1）父も喜び、母も喜んだ。</p> <p>（2）父も喜んだ、母も喜んだ。</p> <p>（3）クリモキマシタ、ハチモキマシタ、ウスモキマシタ。</p> <p>（4）この真心が天に通じ、人の心をも動かしたのであろう。彼の事業はようやく村人の間に理解されはじめた。</p> <p>〔参照一〕この真心が天に通じ、人の心をも動かしたのであろう。彼の事業は……</p> <p>〔参照二〕この真心が天に通じ、人の心をも動かしたのであろう。彼の事業は……</p> <p>（5）昨夜、帰宅以来、お尋ねの件について（、）当時の日誌を調べて見ましたところ、やはり（、）そのとき申し上げた通りでありました。</p> <p>（6）お寺の小僧になつて間もない頃、ある日、おしようにさんから大そうしかられました。</p>

〔附記〕この項の趣旨は、テンではさんだ語句を飛ばして読んでみても、一応、文脈が通るようにうつののである。これがテンの打ち方における最も重要な、一ばん多く使われる原則であって、この原則の範囲内で、それぞれの文に従い適当に調節するのである（例 8 9 10 11）。なお、接続詞、感嘆詞、また、呼びかけや返事の「はい」「いいえ」など、すべて副詞的語句の中に入る（例 12 13 14 15 16 17 18）。

四、形容詞的語句が重なる場合にも、前項の原則に準じてテンをうつ（例 19 20）。

五、右の場合、第一の形容詞的語句の下だけにうってよいことがある（例 21 22）。

六、語なり、意味なりが附著して、読み誤る恐れがある場合にうつ（例 23 24 25 26）。

七、テンは読みの間をあらわす（例 26 参照 27）。

八、提示した語の下にうつ（例 28 29）。

（7）ワタクシハ、オニガシマへ、オニタイジニ、イキマスカラ、

（8）私は反対です。

（9）私は、反対です。

（10）しかし私は、

（11）しかし、私は……

（12）今、一例として、次の事実を報告する。

（13）また、私は……

（14）ただ、例外として、

（15）ただし、汽車区間を除く。

（16）おや、いらっしゃい。

（17）坊や、お出で。

（18）はい、そうです。

（19）くじやくは、長い、美しい尾をおうぎのようにひろげました。

（20）静かな、明るい、高原の春です。

（21）まだ火のよく通らない、生のでんぶん粒のある

くず湯を飲んで、

（22）村はずれにある、うちの雑木山を開墾しはじめてから、

（23）弾き終って、ベートーベンは、つと立ちあがった。

（24）よく晴れた夜、空を仰ぐと、

（25）実はその、外でもありませんが、

（26）「かん、かん、かん。」

（27）「かんくく。」

（28）秋祭、それは村人にとって最も楽しい日です。

（29）香具山・畝火山・耳梨山、これを大和の三山

という。

ナカテン（・）	
<p>九、ナカテンと同じ役目に用いるが（例 30）、特にテンでなくては、かえって読み誤り易い場合がある（例 31）。</p> <p>十、対話または引用文のカギの前にうつ（例 32）。</p> <p>十一、対話または引用文の後を「と」で受けて、その下にテンをうつの二つの場合がある（例 33 34 35）。</p> <p>「といって、」「一と思つて、」などの「と」にはうたない。</p> <p>「と、花子さんは」というように、その「と」の下に主格や、または他の語が来る場合にはうつのである。</p> <p>十二、並列の「と」「も」をともなつて主語が重なる場合には原則としてうつが、必要でない限りは省略する（例 36 37 38 39）。</p> <p>十三、数字の位取りにうつ（例 40 41）</p>	<p>一、ナカテンは、単語の並列の間にうつ（例 1 2）。</p> <p>二、ただし、右のナカテンの代りにテンをうつこともある（例 3）。</p> <p>三、テンとナカテンとを併用して、その対照的效果をねらうことがある（例 4）。</p> <p>四、主格の助詞「が」を省略した場合には、ナカテンでなくテンをうつ（例 5）。</p> <p>五、熟語的語句を成す場合にはナカテンをうたないのが普通である（例 6 7）。</p> <p>六、小数点に用いる（例 8）。</p> <p>七、年月日の言い表しに用いる（例 9 10）。</p>
<p>（30）まつ、すぎ、ひのき、けやきなど</p> <p>（31）天地の公道、人倫の常経</p> <p>（32）さつきの槍ヶ岳が、「ここまでおいで。」というように、</p> <p>（33）「なんという貝だろう。」といつて、みんなで、いろいろ貝の名前を思い出してみましたが、</p> <p>（34）「先生に聞きに行きましょう。」と、花子さんは、その貝をもつて、先生のところへ走って行きました。</p> <p>（35）「おめでとう。」「おめでとう。」と、互に言葉をおかしながら……</p> <p>（36）父と、母と、兄と、姉と、私との五人で、</p> <p>（37）父と母と兄と姉と私との五人で、</p> <p>（38）父も、母も、兄も、姉も、</p> <p>（39）父も母も兄も姉も、</p> <p>（40）一、二三五</p> <p>（41）一、二三四、五六七、八九〇</p>	<p>（1）まつ・すぎ・ひのき・けやきなど、</p> <p>（2）むら雲・おぼろ雲は、巻雲や薄雲・いわし雲などよりも低く、</p> <p>（3）まつ、すぎ、ひのき、けやきなど、</p> <p>（4）明日、東京を立つて、静岡、浜松、名古屋、大阪・京都・神戸、岡山、広島を六日の予定で見えます。</p> <p>（5）米、英・仏と協商【新聞の見出し例】</p> <p>（6）英仏両国</p> <p>（7）英独仏三国</p> <p>（8）一三・五</p> <p>（9）昭和二一・三・一八</p>

	<p>八、外来語のくぎりに用いる（例 11）。</p> <p>九、外国人名のくぎりに用いる（例 12）</p> <p>〔附記〕外国人名の並列にはテンを用いる（例 13）。</p>	<p>（10）二・二六事件</p> <p>（11）テーブル・スピーチ</p> <p>（12）アブラハム・リンカーン</p> <p>（13）ジョージ・ワシントン、アブラハム・リンカーン</p>
<p>ナカセン</p> <p>――</p>	<p>一、ナカセンは話頭をかわすときに用いる（例 1）。</p> <p>二、語句を言いさして余韻をもたせる場合に用いる（例 2）。</p> <p>三、カギでかこむほどでもない語句を地の文と分ける場合に用いる（例 3）。</p> <p>四、時間的・空間的な経過をあらわす（例 4 5）。</p> <p>五、時間的・空間的に「乃至」または「より――まで」の意味をあらわす（例 6 7）。</p> <p>六、かるく「すなわち」の意味をあらわす（例 8 9）。</p> <p>七、補助的説明の語句を文中にはさんで、カッコでかこむよりも地の文に近く取扱いたい場合に用いる（例 10 11）。</p> <p>八、ニホンナカセン（Ⅱ）を短いくぎりに用いることがある（例 12）。</p>	<p>（1）「それはね、――いや、もう止しましょう。」</p> <p>（2）「まあ、ほんとうにおかわいそうに、――」</p> <p>（3）これではならない――といって起ちあがったのがかれであった。</p> <p>（4）五分――十分――十五分</p> <p>（5）汽車は、静岡――浜松――名古屋――京都と、嵐の夜の闇をついて走っていく。</p> <p>（6）そのききめは、少なくとも三―五週間の後でなくてはあらわれません。</p> <p>（7）上野―新橋、渋谷―築地、新宿―日比谷の電車、終夜運転</p> <p>（8）この海の中を流れる大きな河――黒潮は、</p> <p>（9）心持――心理学の用語によれば情緒とか気分とか状態意識とかいうのであるが、</p> <p>（10）ふと、荒城の月の歌ごえが――あの寄宿舎の窓からもれてくるのであるう―――すずしい夜風に乗って聞えてくる。</p> <p>（11）方法論――それは一種の比較形態学である――は、</p> <p>（12）（東京・富田幸平Ⅱ教員）</p>
<p>テンテン</p> <p>……</p> <p>……</p> <p>……</p>	<p>一、テンテンは、ナカセンと同じく、話頭をかわすときや言いさしてやめる場合などに用いる（例 1 2）。</p>	<p>（1）「それからね、……いやいや、もうなんにも申し上げませんまい。」</p> <p>（2）「それもそうだけれど。……」</p>

カギ 「」 フタエカギ 『』	<p>二、テンテンは引用文の省略（上略・中略・下略）を示す（例 3）。</p> <p>三、テンセンは会話で無言を示す（例 4）。</p> <p>四、テンセンはつながぎに用いる（例 5）。</p>	<p>（3）そこで上述のごとき結果になるのである。……</p> <p>（4）「ごめんネ、健ちゃん。」「……」</p> <p>（5）第一章序説……………一頁</p>
カッコ（） ヨコガッコ（）	<p>一、カッコは注釈的語句をかこむ（例 1）。</p> <p>二、編輯上の注意書きや署名などをかこむ（例 2）。</p> <p>三、ヨコガッコは箇条書きの場合、その番号をかこむ（例 3）。</p> <p>〔附記〕なお各種のカッコを適当に用いる。その呼び名を下に掲げる。</p>	<p>（1）広日本文典（明治三十年刊）</p> <p>（2）（その一）（第二回）（承前）（続き）（完）（終）（未完）（続く）（山田）</p> <p>（3）（一）（イ）（a）</p> <p>（イ）フタエガッコ</p> <p>（ロ）ソデガッコ</p> <p>（ハ）カクガッコ</p> <p>（ニ）カメノコガッコ</p>
ツナギ ツナギテン、	<p>一、ツナギは、かな文の分ち書きで、一語が二行にまたがる場合に用いる（例 1）。</p> <p>二、ツナギテンは、数字上「より——まで」の意味に用いる（例 2）。</p>	<p>（1）サルハ トウトウ ジブ</p> <p>（2）一三五・六頁 一五六・八頁</p> <p>ンガ ワルカッタト ア</p> <p>ヤマリマシタ。</p>

		<p>三五九・六〇頁 五九九・六〇〇頁</p>
<p>ワキテン 、、、</p>	<p>一、ワキテンは、原則として、特に読者の注意を求める語句にうつ（例 1）。 二、観念語をかなで書いた場合にうつ（例 2 3）。 三、俗語や方言などを特に用いる場合にうつ（例 4）。</p>	<p>（1）ここにも一人の路、傍の石がある。 （2）着物もあげによって兄にも弟にも使える。 （3）ひるという言葉は、元来はよるに對して用いたものであるが、おひるといって昼飯のことを意味するようになったのは、 （4）ぴんからきりまである。</p>
<p>ワキセン</p>	<p>一、ワキセンはほとんどワキテンと同じ目的で用いる（例 1）。 二、説明上、ある語句の一つにくるめて表示する場合に用いる（例 2）。</p>	<p>（1）次の傍線を引いた語について説明せよ。 そう考えられる。 （2）名辞は、単一の名詞から成ることもあり、あるいは長い名詞句から成ることもある。 人はパンのみにて生くるものにあらず。</p>
<p>疑問符 ？</p>	<p>一、疑問符は、原則として普通の文には用いない。ただし必要に応じて疑問の口調を示す場合に用いる（例 1）。 二、質問や反語の言葉調子の時に用いる（例 2）。 三、漫画などで無言で疑問の意をあらわす時に用いる（例略）。</p>	<p>（1）「ええ？　なんですって？」 （2）「そういたしますと、やがて龍宮へお著きになるでしょう。」 「龍宮へ？」</p>
<p>感嘆符 ！</p>	<p>一、感嘆符も普通の文には原則として用いない。ただし、必要に応じて感動の気持ちをあらわした場合に用いる（例 1）。</p>	<p>（1）「ちがう、ちがう、ちがうぞ！」</p>

二、強め、驚き、皮肉などの口調をあらわした場合に
用いる（例 2）。

（2）放送のとき、しきりに紹介の「さん」づけを止
して「し」にしてくれというので、よくきいてみ
ると、なんと、それは「氏」でなくて「師」であ
った！

資料-10 もっぱら横書きに用いるくぎり符号の使い方

呼び名・符号	準 則	用 例
ピリオド トメテン 終止符 大きく コンマ 小く コロン カサネテン 中の大きく セミコロン テンコンマ 中の小く	一、ピリオドは、ローマ字では終止符として用いるが、横書きの漢字交りかな文では、普通には、ピリオドの代わりにマルをうつ（例 1 2）。 二、テンまたはナカテンの代りに、コンマまたはセミコロンを適当に用いる（例 3 4 5 6）。 三、引用符・ハイフンの用例は略す。半ガッコの用例は下欄で実地に示した。	1) 春が来た。 2) 出た，出た，月が。 3) まつ・すぎ・ひのき・けやきなど， 4) まつ，すぎ，ひのき，けやきなど， 5) 明日，東京を立って，静岡，浜松，名古屋，大阪・京都・神戸，岡山，広島を六日の予定で見えます。 6) 静岡；浜松；名古屋；大阪，京都，神戸；岡山；広島を

資料－11 くり返し符号の使い方

呼び名・符号	準 則	用 例
一つ点 ゝ	<p>一、一つ点は、その上のかな一字の全字形（濁点をふくむ）を代表する。ゆえに、熟語になってにごる場合には濁点をうつが（例2）、濁音のかなを代表する場合にはうたない（例3）。</p> <p>二、「こゝろ」「つゝみ」などを熟語にしてにごる場合には、その「ゝ」をかなに書き改める（例4）。</p> <p>〔備考〕「ゝ」は「と」をさらに簡略化したものである。</p>	<p>(1) ちゝ はゝ</p> <p>(2) たゞ ほゞ</p> <p>(3) ぢゝ ばゝ</p> <p>(4) づつ 小包<small>こづつみ</small> 真心<small>まごころ</small> 案内がかり 気がかり くまざさ</p>
くの字点 く	<p>一、「く」は、二字以上のかな、またはかな交り句を代表する（例1 2 3 4 5）</p> <p>〔備考〕「く」は「とと」「とく」を経て「く」となったものである。</p>	<p>(1) いよ く ます く</p> <p>(2) しみ く それ く</p> <p>(3) しげ く しば く</p> <p>(4) ばら く ごろ く</p> <p>(5) 一つ く 思い く 散り く 代る く 知らず く くり返し く ひらり く エツサツサ く</p>
同の字点 々	<p>一、「々」は漢字一字を代表する（例1 2 3 4 5）。</p> <p>〔備考〕「々」は「全」の字から転化したものと考えられている。</p>	<p>(1) 世々 個々 日々</p> <p>(2) 我々 近々<small>きんきん</small> 近々<small>ちかぢか</small></p> <p>(3) 正々 堂々 年々 歳々</p> <p>(4) 一歩々々 賛成々々</p> <p>(5) 双葉山々々々</p>
二の字点 と と	<p>一、「と」は、手写では「々」と同価に用いられるが（例1）、活字印刷では「々」の方が用いられる（例2）。</p> <p>二、活字印刷で用いる「と」は「と」の別体であるが、その働きは、上の一字を重ねて訓よみにすべきことを示すものである（例3 4）。</p>	<p>(1) 草と</p> <p>(2) 草々</p> <p>(3) 稍<small>（やゝ）</small> 略<small>（ほゞ）</small></p> <p>(4) 愈<small>（いよ）</small> 各<small>（おの）</small></p>

ノノ点 〃	<p>三、「唯」は「唯」と書かない（例5）。</p> <p>四、「各の」「諸の」は「各」「諸」がなくても読みうるが（例67）、普通には「各」「諸」をつける（例8）。</p> <p>五、「各」は「々」で代用される（例910）。殊に「多々益々」はかならず「々」を書く。</p> <p>〔備考〕「各」「諸」は「二」の草書体から転化したものと考えられている。</p> <p>それを小さくして右に片寄せたのが即ち「各」「諸」である。</p> <p>〔付記〕例3456789の類の語は、なるべくかなで書く方がよい。</p>
<p>一、「〃」は簿記にも文章にも用いる（例12）。</p> <p>〔備考〕「〃」は外国で用いられる「”」から転化したものであり、その意味はイタリア語の <i>Ditto</i> 即ち「同上」ということである。なお国によって「”」の形を用いる。</p>	<div><div>(1)</div><div><div>旁(かた)</div><div>屢(しば)</div><div>偶(たま)</div><div>熟(つく)</div><div>唯(たゞ)</div><div>各(おの)</div><div>諸(もろ)</div><div>各(おの)</div><div>各々(おの)</div><div>益々(ます)</div><div>多々益々</div></div><div><div>交(こも)</div><div>抑(そも)</div><div>熟(つら)</div><div>益(ます)</div><div>の意見</div><div>の国</div><div>意見を持ち寄って</div></div></div> <div><div>(2)</div><div>甲案を可とするもの</div><div>乙案 〃</div><div>丙案 〃</div><div>一一八</div><div>三一九</div><div>二六五</div></div>

資料－14 送り仮名の付け方－単独の語*¹（本文）

活用のある語（動詞・形容詞・形容動詞）		
通則 1 * 2	本則* ⁷	活用のある語（除：通則 2 を適用する語）は、活用語尾を送る 例 憤 <u>る</u> 承 <u>る</u> 書 <u>く</u> 実 <u>る</u> 催 <u>す</u> 生 <u>きる</u> 陥 <u>れる</u> 考 <u>える</u> 助 <u>ける</u> 荒 <u>い</u> 潔 <u>い</u> 賢 <u>い</u> 濃 <u>い</u> 主 <u>だ</u>
	例外* ⁸	語幹が「し」で終わる形容詞は、「し」から送る 例 著 <u>しい</u> 惜 <u>しい</u> 悔 <u>しい</u> 恋 <u>しい</u> 珍 <u>しい</u> 活用語尾の前に「か」、「やか」、「らか」を含む形容動詞は、その音節から送る 例 暖 <u>かだ</u> 細 <u>かだ</u> 静 <u>かだ</u> 穏 <u>やかだ</u> 健 <u>やかだ</u> 和 <u>やかだ</u> 明 <u>らかだ</u> 平 <u>らかだ</u> 滑 <u>らかだ</u> 柔 <u>らかだ</u> 次の語は、次に示すように送る 例 明 <u>らむ</u> 味 <u>わう</u> 哀 <u>れむ</u> 慈 <u>しむ</u> 教 <u>わる</u> 脅 <u>かす</u> （おどかす） 脅 <u>かす</u> （おびやかす） 関 <u>わる</u> 食 <u>らう</u> 異 <u>なる</u> 逆 <u>らう</u> 捕 <u>まる</u> 群 <u>がる</u> 和 <u>らぐ</u> 揺 <u>する</u> 明 <u>るい</u> 危 <u>ない</u> 危 <u>うい</u> 大 <u>きい</u> 少 <u>ない</u> 小 <u>さい</u> 冷 <u>たい</u> 平 <u>たい</u> 新 <u>ただ</u> 同 <u>じだ</u> 盛 <u>んだ</u> 平 <u>らだ</u> 懇 <u>ろだ</u> 惨 <u>めだ</u> 哀 <u>れだ</u> 幸 <u>いだ</u> 幸 <u>せだ</u> 巧 <u>みだ</u>
	許容* ⁹	次の語は、（ ）の中に示すように、活用語尾の前の音節から送ることができる 例 表 <u>す</u> （表 <u>わす</u> ） 著 <u>す</u> （著 <u>わす</u> ） 現 <u>れる</u> （現 <u>わ</u> れる） 行 <u>う</u> （行 <u>なう</u> ） 断 <u>る</u> （断 <u>わ</u> る） 賜 <u>る</u> （賜 <u>わ</u> る）
	（注意）	語幹と活用語尾との区別がつかない動詞は、例えば、「着 <u>る</u> 」，「寝 <u>る</u> 」，「来 <u>る</u> 」などのように送る
	（注意）	語幹と活用語尾との区別がつかない動詞は、例えば、「着 <u>る</u> 」，「寝 <u>る</u> 」，「来 <u>る</u> 」などのように送る
通則 2 * 3	本則	活用語尾以外の部分に他の語を含む語は、含まれている語の送り仮名の付け方によって送る（含まれている語を〔 〕の中に示す） 動詞の活用形またはそれに準ずるものを含むもの 例 動 <u>かす</u> 〔動く〕 照 <u>らす</u> 〔照る〕 語 <u>らう</u> 〔語る〕 計 <u>らう</u> 〔計る〕 向 <u>かう</u> 〔向く〕 浮 <u>かぶ</u> 〔浮く〕 生 <u>まれる</u> 〔生む〕 押 <u>さえる</u> 〔押す〕 捕 <u>らえる</u> 〔捕る〕 勇 <u>ましい</u> 〔勇む〕 輝 <u>かしい</u> 〔輝く〕 喜 <u>ばしい</u> 〔喜ぶ〕 晴 <u>れやかだ</u> 〔晴れる〕 及 <u>ばす</u> 〔及ぶ〕 積 <u>もる</u> 〔積む〕 聞 <u>こえる</u> 〔聞く〕 頼 <u>もしい</u> 〔頼む〕 起 <u>こる</u> 〔起きる〕 落 <u>とす</u> 〔落ちる〕 暮 <u>らす</u> 〔暮れる〕 冷 <u>やす</u> 〔冷える〕 当 <u>たる</u> 〔当てる〕 終 <u>わる</u> 〔終わる〕 変 <u>わる</u> 〔変える〕 集 <u>まる</u> 〔集める〕 定 <u>まる</u> 〔定める〕 連 <u>なる</u> 〔連ねる〕 交 <u>わる</u> 〔交える〕 混 <u>ざる</u> ・混 <u>じる</u> 〔混ぜる〕 恐 <u>ろしい</u> 〔恐れる〕

		<p>形容詞・形容動詞の語幹を含むもの</p> <p>例 <u>重</u>んずる〔重い〕 <u>若</u>やぐ〔若い〕 <u>怪</u>しむ〔怪しい〕 <u>悲</u>しむ〔悲しい〕 <u>苦</u>しがる〔苦しい〕 <u>確</u>かめる〔確かだ〕 <u>重</u>たい〔重い〕 <u>憎</u>らしい〔憎い〕 <u>古</u>めかしい〔古い〕 <u>細</u>かい〔細かだ〕 <u>柔</u>らかい〔柔らかだ〕 <u>清</u>らかだ〔清い〕 <u>高</u>らかだ〔高い〕 <u>寂</u>しげだ〔寂しい〕</p> <p>名詞を含むもの</p> <p>例 <u>汗</u>ばむ〔汗〕 <u>先</u>んずる〔先〕 <u>春</u>めく〔春〕 <u>男</u>らしい〔男〕 <u>後</u>ろめたい〔後ろ〕</p>
	許容	<p>読み間違えるおそれのない場合は、活用語尾以外の部分について、次の（ ）の中に示すように、送り仮名を省くことができる</p> <p>例 <u>浮</u>かぶ〔浮ぶ〕 <u>生</u>まれる〔生れる〕 <u>押</u>さえる〔押える〕 <u>捕</u>らえる〔捕える〕 <u>晴</u>れやかだ〔晴やかだ〕 <u>積</u>もる〔積る〕 <u>聞</u>こえる〔聞える〕 <u>起</u>こる〔起る〕 <u>落</u>とす〔落す〕 <u>暮</u>らす〔暮す〕 <u>当</u>たる〔当る〕 <u>終</u>わる〔終る〕 <u>変</u>わる〔変る〕</p>
	(注意)	<p>次の語は、それぞれ〔 〕の中に示す語を含むものとは考えず、通則 1 によるものとする</p> <p><u>明</u>るい〔明ける〕 <u>荒</u>い〔荒れる〕 <u>悔</u>しい〔悔いる〕 <u>恋</u>しい〔恋う〕</p>
活用のない語（名詞・副詞・連体詞・接続詞）		
通則 3 * 4	本則	<p>名詞（除：通則 4 を適用する語）は、送り仮名を付けない</p> <p>例 月 鳥 花 山 男 女 彼 何</p>
	例外	<p>次の語は、最後の音節を送る</p> <p><u>辺</u>り <u>哀</u>れ <u>勢</u>い <u>幾</u>ら <u>後</u>ろ <u>傍</u>ら <u>幸</u>い <u>幸</u>せ <u>全</u>て <u>互</u>い <u>便</u>り <u>半</u>ば <u>情</u>け <u>斜</u>め <u>独</u>り <u>誉</u>れ <u>自</u>ら <u>災</u>い</p> <p>数をかぞえる「つ」を含む名詞は、その「つ」を送る</p> <p>例 <u>一</u>つ <u>二</u>つ <u>三</u>つ <u>幾</u>つ</p>
通則 4 * 5	本則	<p>活用のある語から転じた名詞および活用のある語に「さ」、「み」、「げ」などの接尾語が付いて名詞になったものは、もとの語の送り仮名の付け方によって送る</p> <p>活用のある語から転じたもの</p> <p>例 <u>動</u>き <u>仰</u>せ <u>恐</u>れ <u>薫</u>り <u>曇</u>り <u>調</u>べ <u>届</u>け <u>願</u>い <u>晴</u>れ <u>当</u>たり <u>代</u>わり <u>向</u>かい <u>狩</u>り <u>答</u>え <u>問</u>い <u>祭</u>り <u>群</u>れ <u>憩</u>い <u>愁</u>い <u>憂</u>い <u>香</u>り <u>極</u>み <u>初</u>め <u>近</u>く <u>遠</u>く</p> <p>「さ」、「み」、「げ」などの接尾語が付いたもの</p> <p>例 暑<u>さ</u> 大<u>き</u>さ 正<u>し</u>さ 確<u>か</u>さ 明<u>る</u>み 重<u>み</u> 憎<u>し</u>み 惜<u>し</u>げ</p>
	例外	<p>次の語は、送り仮名を付けない</p>

		<p> <u>謡</u> <u>虞</u> <u>趣</u> <u>氷</u> <u>印</u> <u>頂</u> <u>帯</u> <u>量</u> <u>卸</u> <u>煙</u> <u>恋</u> <u>志</u> <u>次</u> <u>隣</u> <u>富</u> <u>恥</u> <u>話</u> <u>光</u> <u>舞</u> <u>折</u> <u>係</u> <u>掛</u>（かかり） <u>組</u> <u>肥</u> <u>並</u>（なみ） <u>巻</u> <u>割</u> </p> <p>（注意）ここに掲げた「組」は、「花の組」，「赤の組」などのように使った場合の「くみ」であり，例えば，「活字の組みがゆるむ」などとして使う場合の「くみ」を意味するものではない。「光」，「折」，「係」なども，同様に動詞の意識が残っているような使い方の場合は，この例外に該当しない。したがって，本則を適用して送り仮名を付ける</p>
	許容	<p>読み間違えるおそれのない場合は，次の（ ）の中に示すように，送り仮名を省くことができる</p> <p>例 <u>曇</u>り（曇） <u>届</u>け（届） <u>願</u>い（願） <u>晴</u>れ（晴） <u>当</u>たり（当り） <u>代</u>わり（代り） <u>向</u>かい（向い） <u>狩</u>り（狩） <u>答</u>え（答） <u>問</u>い（問） <u>祭</u>り（祭） <u>群</u>れ（群） <u>憩</u>い（憩）</p>
通則 5 * 6	本則	<p>副詞・連体詞・接続詞は，最後の音節を送る</p> <p>例 <u>必</u>ず <u>更</u>に <u>少</u>し <u>既</u>に <u>再</u>び <u>全</u>く <u>最</u>も <u>来</u>る <u>去</u>る <u>及</u>び <u>且</u>つ <u>但</u>し</p>
	例外	<p>次の語は，次に示すように送る</p> <p><u>明</u>くる <u>大</u>いに <u>直</u>ちに <u>並</u>びに <u>若</u>しくは</p> <p>次の語は，送り仮名を付けない</p> <p>又</p> <p>次のように，他の語を含む語は，含まれている語の送り仮名の付け方によって送る（含まれている語を〔 〕の中に示す）</p> <p>例 <u>併</u>せて〔併せる〕 <u>至</u>って〔至る〕 <u>恐</u>らく〔恐れる〕 <u>従</u>って〔従う〕 <u>絶</u>えず〔絶える〕 <u>例</u>えば〔例える〕 <u>努</u>めて〔努める〕 <u>辛</u>うじて〔辛い〕 <u>少</u>なくとも〔少ない〕 <u>互</u>いに〔互い〕 <u>必</u>ずしも〔必ず〕</p>

* 1 単独の語：漢字の音または訓を単独に用いて，漢字一字で書き表す語。

* 2 通則 1：活用語尾を送る語に関するもの。

* 3 通則 2：派生・対応の関係を考慮して，活用語尾の前の部分から送る語に関するもの。

* 4 通則 3：名詞であって，送り仮名を付けない語に関するもの。

* 5 通則 4：活用のある語から転じた名詞であって，もとの語の送り仮名の付け方によって送る語に関するもの。

* 6 通則 5：副詞・連体詞・接続詞に関するもの。

* 7 本則：送り仮名の付け方の基本的な法則と考えられるもの。

* 8 例外：本則には合わないが，慣用として行われていると認められるものであって，本則によらず，これによるもの。

* 9 許容：本則による形とともに，慣用として行われていると認められるものであって，本則以外に，これによってよいもの。

図表－15 送り仮名の付け方－複合の語*¹（本文）

通則 6 * 2	本則	<p>複合の語（除：通則 7 を適用する語）の送り仮名は，その複合の語を書き表す漢字の，それぞれの音訓を用いた単独の語の送り仮名の付け方による</p> <p>活用のある語</p> <p>例 書き<u>抜</u>く 流れ<u>込</u>む 申し<u>込</u>む 打ち<u>合</u>わせる 向<u>か</u>い<u>合</u>わせる 長<u>引</u>く 若<u>返</u>る 裏<u>切</u>る 旅立<u>つ</u> 聞<u>き</u>苦<u>し</u>い 薄<u>暗</u>い 草<u>深</u>い 心<u>細</u>い 待<u>ち</u>遠<u>し</u>い 軽々<u>し</u>い 若々<u>し</u>い 女々<u>し</u>い 気<u>軽</u>だ 望<u>み</u>薄<u>だ</u></p> <p>活用のない語</p> <p>例 石橋 竹馬 山津波 後<u>ろ</u>姿 斜<u>め</u>左 花便<u>り</u> 独<u>り</u>言 卸商 水煙 目印 田植<u>え</u> 封切<u>り</u> 物知<u>り</u> 落書<u>き</u> 雨上<u>が</u>り 墓参<u>り</u> 日当<u>た</u>り 夜明<u>か</u>し 先駆<u>け</u> 巢立<u>ち</u> 手渡<u>し</u> 入<u>り</u>江 飛<u>び</u>火 教<u>え</u>子 合<u>わ</u>せ鏡 生<u>き</u>物 落<u>ち</u>葉 預<u>か</u>り金 寒空 深情<u>け</u> 愚<u>か</u>者 行<u>き</u>帰<u>り</u> 伸<u>び</u>縮<u>み</u> 乗<u>り</u>降<u>り</u> 抜<u>け</u>駆<u>け</u> 作<u>り</u>笑<u>い</u> 暮<u>ら</u>し向<u>き</u> 売<u>り</u>上<u>げ</u> 取<u>り</u>扱<u>い</u> 乗<u>り</u>換<u>え</u> 引<u>き</u>換<u>え</u> 歩<u>み</u>寄<u>り</u> 申<u>し</u>込<u>み</u> 移<u>り</u>変<u>わ</u>り 長生<u>き</u> 早起<u>き</u> 苦<u>し</u>紛<u>れ</u> 大<u>写</u>し 粘<u>り</u>強<u>さ</u> 有<u>り</u>難<u>み</u> 待<u>ち</u>遠<u>し</u>さ 乳飲<u>み</u>子 無理強<u>い</u> 立<u>ち</u>居振<u>る</u>舞<u>い</u> 呼<u>び</u>出<u>し</u>電話 次々 常々 近々 深々 休<u>み</u>休<u>み</u> 行<u>く</u>行<u>く</u></p>
	許容	<p>読み間違えるおそれのない場合は，次の（ ）の中に示すように，送り仮名を省くことができる</p> <p>例 書き<u>抜</u>く（書<u>抜</u>く） 申し<u>込</u>む（申<u>込</u>む） 打ち<u>合</u>わせる（打<u>合</u>せる・打<u>合</u>せる） 向<u>か</u>い<u>合</u>わせる（向<u>合</u>せる） 聞<u>き</u>苦<u>し</u>い（聞<u>苦</u>しい） 待<u>ち</u>遠<u>し</u>い（待<u>遠</u>しい） 田植<u>え</u>（田植） 封切<u>り</u>（封切） 落書<u>き</u>（落書） 雨上<u>が</u>り（雨上り） 日当<u>た</u>り（日当り） 夜明<u>か</u>し（夜明し） 入<u>り</u>江（入江） 飛<u>び</u>火（飛火） 合<u>わ</u>せ鏡（合<u>せ</u>鏡） 預<u>か</u>り金（預り金） 抜<u>け</u>駆<u>け</u>（抜<u>駆</u>け） 暮<u>ら</u>し向<u>き</u>（暮<u>し</u>向<u>き</u>） 売<u>り</u>上<u>げ</u>（売<u>上</u>げ・売<u>上</u>） 取<u>り</u>扱<u>い</u>（取<u>扱</u>い・取<u>扱</u>） 乗<u>り</u>換<u>え</u>（乗<u>換</u>え・乗<u>換</u>） 引<u>き</u>換<u>え</u>（引<u>換</u>え・引<u>換</u>） 申<u>し</u>込<u>み</u>（申<u>込</u>み・申<u>込</u>） 移<u>り</u>変<u>わ</u>り（移<u>り</u>変<u>り</u>） 有<u>り</u>難<u>み</u>（有<u>難</u>み） 待<u>ち</u>遠<u>し</u>さ（待<u>遠</u>しさ） 立<u>ち</u>居振<u>る</u>舞<u>い</u>（立<u>ち</u>居振<u>舞</u>い・立<u>ち</u>居振<u>舞</u>・立<u>居</u>振<u>舞</u>） 呼<u>び</u>出<u>し</u>電話（呼<u>出</u>し電話・呼<u>出</u>電話）</p>

	(注意)	「こけら落とし(こけら落し)」、「さび止め」、「洗いざらし」、「打ちひも」のように前または後ろの部分を仮名で書く場合は、他の部分については、単独の語の送り仮名の付け方による
通則 7 * 3	複合の語のうち、次のような名詞は、慣用に従って、送り仮名を付けない	
特定の領域の語で、慣用が固定していると認められるもの	ア	地位・身分・役職等の名 関取 頭取 取締役 事務取扱
	イ	工芸品の名に用いられた「織」、「染」、「塗」等 《博多》織 《型絵》染 《春慶》塗 《鎌倉》彫 《備前》焼
	ウ	その他 書留 気付 切手 消印 小包 振替 切符 踏切 請負 売値 買値 仲買 歩合 両替 割引 組合 手当 倉敷料 作付面積 売上《高》 貸付《金》 借入《金》 繰越《金》 小売《商》 積立《金》 取扱《所》 取扱《注意》 取次《店》 取引《所》 乗換《駅》 乗組《員》 引受《人》 引受《時刻》 引換《券》 《代金》引換 振出《人》 待合《室》 見積《書》 申込《書》
一般に、慣用が固定していると認められるもの		奥書 木立 子守 献立 座敷 試合 字引 場合 羽織 葉巻 番組 番付 日付 水引 物置 物語 役割 屋敷 夕立 割合 合図 合間 植木 置物 織物 貸家 敷石 敷地 敷物 立場 建物 並木 巻紙 受付 受取 浮世絵 絵巻物 仕立屋
	(注意)	(1) 「《博多》織」、「売上《高》」などのようにして掲げたものは、《 》の中を他の漢字で置き換えた場合にも、この通則を適用する (2) 通則 7 を適用する語は、例として挙げたものだけで尽くしてはいない。したがって、慣用が固定していると認められる限り、類推して同類の語にも及ぼすものである。通則 7 を適用してよいかどうか判断し難い場合には、通則 6 を適用する

* 1 複合の語：漢字の訓と訓、音と訓などを複合させ、漢字二字以上を用いて書き表す語。

* 2 通則 6：単独の語の送り仮名の付け方による語に関するもの。

* 3 通則 7：慣用に従って送り仮名を付けない語に関するもの。

資料－16 送り仮名の付け方―付表の語*（本文）

送り仮名を送る	次の語は、次に示すように送る 浮 <u>つく</u> お巡 <u>り</u> さん 差 <u>し</u> 支 <u>え</u> る 立 <u>ち</u> 退 <u>く</u> 手伝 <u>う</u> 最寄 <u>り</u> なお、次の語は、（ ）の中に示すように、送り仮名を省くことができる 差 <u>し</u> 支 <u>え</u> る（差支える） 立 <u>ち</u> 退 <u>く</u> （立退く）
送り仮名をつけない	息吹 棧敷 時雨 築山 名残 雪崩 吹雪 迷子 行方

* 付表の語：「常用漢字表」の付表に掲げてある語のうち、送り仮名の付け方が問題となる語。

資料－19 外来語の表記 留意事項その2（細則的な事項）

以下に示す語例は、それぞれの仮名の用法の一例を示すものであって、その語をいつもそう書かなければならないことを意味するものではない。語例のうち、知名・人名には、それぞれ（地）、（人）の文字を添えた

第1表（本文の巻末資料：資料－17「「外来語の表記」に用いる仮名と符号の表」参照）に示す「シェ」以下の仮名（外来語や外国の地名・人名を書き表すのに一般的に用いる仮名）に関するもの	
「シェ」「ジェ」	外来音シェ、ジェに対応する仮名 例 シェーカー シェード ジェットエンジン ダイジェスト シェフィールド（地） アルジェリア（地） シェークスピア（人） ミケランジェロ（人） 注 「セ」「ゼ」と書く慣用のある場合は、それによる 例 ミルクセーキ ゼラチン
「チェ」	外来音チェに対応する仮名 例 チェーン チェス チェック マンチェスター（地） チャーホフ（人）
「ツァ」「ツェ」 「ツォ」	外来音ツァ、ツェ、ツォに対応する仮名 例 コンツェルン シャンツェ カンツォーネ フィレンツェ（地） モーツァルト（人） ツェッペリン（人）
「ティ」「ディ」	外来音ティ、ディに対応する仮名 例 テーパーティー ボランティア ディーゼルエンジン ビルディング アトランティックシティー（地） ノルマンディー（地） ドニゼッティ（人） ディズニー（人） 注1 「チ」「ジ」と書く慣用のある場合は、それによる 例 エチケット スチーム プラスチック スタジアム スタジオ ラジオ チロル（地） エジソン（人） 注2 「テ」「デ」と書く慣用のある場合は、それによる 例 ステッキ キャンデー デザイン
「ファ」「フィ」 「フェ」「フォ」	外来音ファ、フィ、フェ、フォに対応する仮名 例 ファイル フィート フェンシング フォークダンス バッファロー（地） フィリピン（地）

	<p>フェアバンクス（地） カリフォルニア（地） ファール（人） マンスフィールド（人） エッフェル（人） フォスター（人）</p> <p>注1 「ハ」「ヒ」「ヘ」「ホ」と書く慣用のある場合は、それによる 例 セロハン モルヒネ プラットホーム ホルマリン メガホン</p> <p>注2 「ファン」「フィルム」「フェルト」等は、「フアン」「ファイルム」「フェルト」と書く慣用もある</p>
「デュ」	<p>外来音デュに対応する仮名</p> <p>例 デュエット プロデューサー デュッセルドルフ（地） デューイ（人）</p> <p>注 「ジュ」と書く慣用のある場合は、それによる 例 ジュース（deuce） ジュラルミン</p>
<p>第2表（本文の巻末資料：資料－17「「外来語の表記」に用いる仮名と符号の表」参照）に示す仮名（外来語や外国の地名・人名を原音や原つづりになるべく近く書き表そうとする場合に用いる仮名。これらの仮名を用いる必要がない場合は、一般的に、第1表に示す仮名の範囲で書き表すことができる）に関するもの</p>	
「イエ」	<p>外来音イエに対応する仮名</p> <p>例 イエルサレム（地） イエーツ（人）</p> <p>注 一般的には、「イエ」または「エ」と書くことができる 例 エルサレム（地） イエーツ（人）</p>
「ウイ」「ウエ」「ウオ」	<p>外来音ウイ、ウエ、ウオに対応する仮名</p> <p>例 ウィスキー ウェディングケーキ ストップウォッチ ウィーン（地） スウェーデン（地） ミルウォーキー（地） ウィルソン（人） ウェブスター（人） ウォルポール（人）</p> <p>注1 一般的には、「ウイ」「ウエ」「ウオ」と書くことができる 例 ウィスキー ウイット ウェディングケーキ ウエハース ストップウォッチ</p> <p>注2 「ウ」を省いて書く慣用のある場合は、それによる 例 サンドイッチ スイッチ スイートピー</p> <p>注3 地名・人名の場合は、「ウイ」「ウエ」「ウオ」と書く慣用が強い</p>
「クア」「クイ」「クエ」「クオ」	<p>外来音クア、クイ、クエ、クオに対応する仮名</p> <p>例 クアルテット クインテット クェスチョンマーク クオータリー</p> <p>注1 一般的には、「クア」「クイ」「クエ」「クオ」または「カ」「キ」「ケ」「コ」と書くことができる 例 クアルテット クインテット クェスチョンマーク クオータリー カルテット レモンスカッシュ キルティング イコール</p> <p>注2 「クア」は、「クワ」と書く慣用もある</p>
「グア」	<p>外来音グアに対応する仮名</p> <p>例 グアテマラ（地） パラグアイ（地）</p> <p>注1 一般的には、「グア」または「ガ」と書くことができる 例 グアテマラ（地） パラグアイ（地） ガテマラ（地）</p> <p>注2 「グア」は、「グワ」と書く慣用もある</p>

「ツィ」	<p>外来音ツィに対応する仮名</p> <p>例 ソルジェニーツィン（人） ティツィアーノ（人）</p> <p>注 一般的には、「チ」と書くことができる</p> <p>例 ライプチヒ（地） ティチアーノ（人）</p>
「トゥ」「ドウ」	<p>外来音トゥ、ドウに対応する仮名</p> <p>例 トゥールーズ（地） ハチャトゥリヤン（人） ヒンドゥー教</p> <p>注 一般的には、「ヅ」「ズ」または「ト」「ド」と書くことができる</p> <p>例 ツアー（tour） ツーピース ツールーズ（地） ヒンズー教 ハチャトリヤン（人） ドビュッシー（人）</p>
「ヴァ」「ヴィ」 「ヴ」「ヴェ」 「ヴォ」	<p>外来音ヴァ、ヴィ、ヴ、ヴェ、ヴォに対応する仮名</p> <p>例 ヴァイオリン ヴィーナス ヴェール ヴィクトリア（地） ヴェルサイユ（地） ヴォルガ（地） ヴィヴァルディ（人） ヴラマンク（人） ヴォルテール（人）</p> <p>注 一般的には「バ」「ビ」「ブ」「ベ」「ボ」と書くことができる</p> <p>例 バイオリン ビーナス ベール ビクトリア（地） ベルサイユ（地） ボルガ（地） ビバルディ（人） ブラマンク（人） ボルテール（人）</p>
「テュ」	<p>外来音テュに対応する仮名</p> <p>例 テューバ（楽器） テュニジア（地）</p> <p>注 一般的には、「チュ」と書くことができる</p> <p>例 コスチューム スチュワードス チューバ チューブ チュニジア（地）</p>
「フュ」	<p>外来音フュに対応する仮名</p> <p>例 フュージョン フュン島（地・デンマーク） ドレフュス（人）</p> <p>注 一般的には、「ヒュ」と書くことができる</p> <p>例 ヒューズ</p>
「ヴュ」	<p>外来音ヴュに対応する仮名</p> <p>例 インタヴュー レヴュー ヴュイヤール（人・画家）</p> <p>注 一般的には、「ビュ」と書くことができる</p> <p>例 インタビュー レビュー ビュイヤール（人）</p>
撥音，促音，長音その他に関するもの	
撥音	<p>「ン」を用いて書く</p> <p>例 コンマ シャンソン トランク メンバー ランニング ランプ ロンドン（地） レンブラント（人）</p> <p>注 1 撥音を入れない慣用のある場合は，それによる</p> <p>例 イニング（←インニング） サマータイム（←サンマータイム）</p> <p>注 2 「シンポジウム」を「シムポジウム」と書くような慣用もある</p>
促音	<p>小書きの「ッ」を用いて書く</p> <p>例 カップ シャッター リュックサック ロッテルダム（地） バッハ（人）</p> <p>注 促音を入れない慣用のある場合は，それによる</p> <p>例 アクセサリー（←アクセッサリー）</p>

	フィリピン（地）（←フィリッピン）
長音	<p>原則として長音符号「ー」を用いて書く 例 エネルギー オーバーコート グループ ゲーム ショー テーブル パーティー ウェールズ（地） ポーランド（地） ローマ（地） ゲーテ（人） ニュートン（人）</p> <p>注1 長音符号の代わりに母音字を添えて書く慣用もある 例 バレエ（舞踊） ミイラ</p> <p>注2 「エー」「オー」と書かず、「エイ」「オウ」と書くような慣用のある場合は、それによる 例 エイト ペイント レイアウト スペイン（地） ケインズ（人） サラダボウル ボウリング（球技）</p> <p>注3 英語の語末の -er, -or, -ar などに当たるものは、原則としてア列の長音とし長音符号「ー」を用いて書き表す。ただし、慣用に応じて「ー」を省くことができる 例 エレベーター ギター コンピューター マフラー エレベータ コンピュータ スリッパ</p>
イ列・エ列の音の次のアの音に当たるもの	<p>原則として「ア」と書く 例 グラビア ピアノ フェアプレー アジア（地） イタリア（地） ミネアポリス（地）</p> <p>注1 「ヤ」と書く慣用のある場合は、それによる 例 タイヤ ダイヤモンド ダイアル ベニヤ板</p> <p>注2 「ギリシャ」「ペルシャ」について「ギリシア」「ペルシア」と書く慣用もある</p>
語末（特に元素名等）の-(i)umに当たるもの	<p>原則として、「-（イ）ウム」と書く 例 アルミニウム カルシウム ナトリウム ラジウム サナトリウム シンポジウム プラネタリウム</p> <p>注 「アルミニウム」を「アルミニューム」と書くような慣用もある</p>
英語のつづりのxに当たるもの	<p>「クサ」「クシ」「クス」「クソ」と書くか、「キサ」「キシ」「キス」「キソ」と書くかは、慣用に従う 例 タクシー ボクシング ワックス オックスフォード（地） エキストラ タキシード ミキサー テキサス（地）</p>
拗音に用いる「ヤ」「ユ」「ヨ」は小書きにする 「ヴァ」「ヴィ」「ヴェ」「ヴォ」や「トゥ」のように組み合わせて用いる場合の「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」も、小書きにする	
複合した語であることを示すための、つなぎの符号の使い方	<p>それぞれの分野の慣用に従うものとし、ここでは取決めを行わない 例 ケース バイ ケース ケース・バイ・ケース ケース-バイ-ケース マルコ・ポーロ マルコ＝ポーロ</p>

資料－20 印刷校正記号表

表1 修正の指示及び組版指定に用いる主記号

番号	修正又は組 指定の内容	記号		番号	修正又は組 指定の内容	記号	
		記号	記入例（左）及び修正結果（右）			記号	記入例（左）及び修正結果（右）
1.1	文字・記号の修正			1.3	圈点等の指示		
1.1.1	文字・記号 を取り替える		取り換える 替 本の規格を の企画 本を規格を の企画を	1.3.1	圈点（傍 点）を付け る		ひらの文字 ひらの文字
1.1.2	直音を示す 仮名を小書 きの仮名に 直す		グリッド グリッド	1.3.2	傍線・下 線・抹消線 を付ける		ひらの文字 ひらの文字 ひらの文字 ひらの文字
1.1.3	小書きの仮 名を直音を 示す仮名に 直す		かつての かつての	1.4	文字書式の変更		
1.1.4	文字・記号 を削除し、 その部分を 詰める		原稿の作成 原稿作成 責任者と 責了と	1.4.1	文字サイズ 又は書体 を変更する		原稿は 原稿は ゴチ 原稿は
1.1.5	文字・記号 を削除し、 その部分を 空けておく		組版は一般に 組版 一般に	1.4.2	イタリック 体に直す		italic italic sin x sin x
1.1.6	文字・記号 を挿入する		合せてわ 合わせて	1.4.3	立体に直す		revised proof revised proof
1.1.7	文字を入れ 替える		左とじ 左とじ	1.4.4	ボールドに 直す		bold bold a+b a+b
1.1.8	修正を取り やめ、校正 刷又は出力 見本の状態 のままとす る		組版方法 組版方法 イキ	1.4.5	ボールドイ タリックに 直す		bold bold a+b a+b
1.2	ルビの修正			1.4.6	大文字に直 す		capital Capital Capital CAPITAL
1.2.1	ルビを付け る		本の平と 本の平と	1.4.7	小文字に直 す		SMALL letter small letter Small letter small letter
1.2.2	ルビを取り 替える		上付き 上付き	1.4.8	スモールキ ャビタルに 直す		Tomonaga Tomonaga B.C. B.C.
1.2.3	ルビを削除 する		箔押し 箔押し	1.4.9	普通の文字 を下付き文 字に直す		Na2SO4 Na2SO4
1.2.4	ルビを挿入 する		並び線 並び線	1.4.10	下付き文字 を普通の文 字に直す		CuFeS2 CuFeS2

修正又は組指定の内容			記号		修正又は組指定の内容			記号	
番号	指定の内容	記号	記入例(左)及び修正結果(右)		番号	指定の内容	記号	記入例(左)及び修正結果(右)	
1.4.11	普通の文字を上付き文字に直す		$1\text{ t}=10^3\text{ kg}$	$1\text{ t}=10^3\text{ kg}$	1.7	改行、改丁・改ページ等及び送りの指示			
1.4.12	上付き文字を普通の文字に直す		$1\text{ km}=10^3\text{ m}$	$1\text{ km}=10^3\text{ m}$	1.7.1	改行に変更する		原稿引合せを行う。 この場合には、次の	原稿引合せを行う。 この場合には、次の
1.4.13	上付き文字を下付き文字に直す		$a_2+b_2=c_2$	$a_2+b_2=c_2$	1.7.2	改行を取り消し、行を続ける		原稿引合せを行う。 この場合には、次の	原稿引合せを行う。 この場合には、次の
1.4.14	下付き文字を上付き文字に直す		$x^2-y^2=0$	$x^2-y^2=0$	1.7.3	指定の位置まで文字・行などを移動する		初校 最初の校正 刷が届けられ	初校 最初の校正 刷が届けられ
1.4.15	縦中横に直す		12月13日	12月13日				初校 最初の校正 刷が届けられ	初校 最初の校正 刷が届けられ
1.4.16	合字に変更する		preflighting figure	preflighting figure				初校 最初の校正 刷が届けられ	初校 最初の校正 刷が届けられ
1.5	文字の転倒、不良文字及び文字の並びの修正								
1.5.1	活字組版において転倒した文字・記号を正しい向きにする		字の転倒	字の転倒	1.7.4	改丁・改ページ・改段を指示する	改丁 改ページ 改段		
1.5.2	活字組版等において不良の文字・記号を直す		字が不良	字が不良	1.7.5	文字の送りを指示する		図は本文の関係記事の前にできるだけ配置しないようにする。	図は本文の関係記事の前にできるだけ配置しないようにする。
1.5.3	文字の並びを正す		字の並び	字の並び				各見出しの前後のアーキがほぼ同一になるように決めておく。	各見出しの前後のアーキがほぼ同一になるように決めておく。
1.6	字間の調整								
1.6.1	空いている字間をベタ組にする		ベタ 校正刷	ベタ 校正刷				各見出しのアーキがほぼ同一になるように決めておく。	各見出しのアーキがほぼ同一になるように決めておく。
1.6.2	詰め組をベタ組にする		ベタニモドス 原稿と校正刷	ベタニモドス 原稿と校正刷				各見出しのアーキがほぼ同一になるように決めておく。	各見出しのアーキがほぼ同一になるように決めておく。
1.6.3	字間の空き量を指示する		四分 組版指定 四分アキ 原稿編集	四分 組版指定 四分アキ 原稿編集	1.7.6	行の送りを指示する			

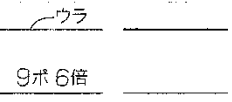
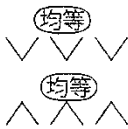
号	修正又は組 指定の内 容	記号		番号	修正又は組 指定の内 容	記号	
		記号	記入例 (左) 及び修正結果 (右)			記号	記入例 (左) 及び修正結果 (右)
1.8	その他の修正			1.9.2	三校の校正 刷の提出を 指示する	要三校	
1.8.1	けい (罫) 線を指示す る	オモテ ウラ 中細 9ポ13倍		1.9.3	念校の校正 刷の提出を 指示する	要念校	
1.9	校正作業の進行に対する指示			1.9.4	責任校了を 指示する	責了	
1.9.1	再校の校正 刷の提出を 指示する	要再校		1.9.5	校了を指示 する	校了	

表2 修正の指示及び組版指定に用いる併用記号

番号	修正又は組版指定 の内容	記号及び使い方	
		記号	使い方
2.1	文字・記号の種類等を示す併用記号		
2.1.1	文字サイズを指示 する	ポ Q	ポイントは“ポ”，級は“Q”の 単位を付けてサイズを指示する。 ポイント又は級以外の単位を使 用する場合は，その単位を付け て指示する。 注記 単位の例 1ポイント＝0.3514 mm (JIS Z 8305 参照) 1Q＝0.25 mm
2.1.2	書体を指示する	明 ゴチ アンチ	明朝体は，“明”と指示する。 明朝体の指示では，“M”又は “m”はマゼンタの色指定と間 違いやすいので使用しない。 ゴシック体は，“ゴチ”と指示 する。ゴシック体の指示では， “G”又は“g”はグリーンの色 指定と間違いやすいので使用し ない。 アンチック体は，“アンチ”と 指示する。 “明”，“ゴチ”又は“アンチ” だけでは指示できない場合は， 正確なフォント名で指示する。
2.1.3	欧文のプロポーシ ョナルの文字にす る	欧文 又は オウフン	“欧文”又は“オウフン”と記 し，丸で囲んで指示する。
2.1.4	全角の文字にする	全角	半角の文字又はプロポーショ ナルの文字を全角の文字に直す。
2.1.5	半角の文字にする	半角	アラビア数字などで使用する。

番号	修正又は組版指定の内容	記号及び使い方	
		記号	使い方
2.1.6	四分角の文字にする	四分	ピリオド，コンマなどを使用する。
2.1.7	句読点を示す		縦組では句読点を“<”で囲み，横組では句読点を“^”で囲む。
2.1.8	中点類を示す		中点は，“□”で囲む。コロンは，“○”で囲む。セミコロンは，字形を正確に書く。
2.1.9	リーダーを示す		3点又は2点の点の数を正確に書き，“□”で囲む。
2.1.10	ダッシュ（ダーシ）を示す	縦組の場合 横組の場合 又は	二分ダッシュは長方形又は三角形，全角ダッシュは正方形と，枠の大きさ又は形で二分と全角が分かるように示す。
2.1.11	ハイフンを示す		と指示する。
2.1.12	シングル引用符又はダブル引用符を示す		それぞれを“∨”で囲む。
2.1.13	アポストロフィ及びプライム記号を示す		それぞれを“∨”で囲む。
2.1.14	ダブルミニュートを示す		始めダブルミニュートは“<”，終わりダブルミニュートは“>”で囲む。
2.1.15	斜線を示す		全角の斜線は正方形，二分の斜線又はプロポーションナルの斜線は長方形で囲む。

番号	修正又は組版指定の内容	記号及び使い方	
		記号	使い方
2.1.16	紛らわしい文字・記号を指示する		<p>ダッシュと似たマイナス、音引など、区別が付きにくい文字・記号では、その字形の傍らに片仮名などで文字・記号の種類を指示する。</p> <p>ギリシャ文字で、ラテン文字と似ている場合は、“α”と指示する。</p>
2.1.17	複数箇所を同一文字に直す指示をする	$\Delta = \blacksquare$	出力見本又は校正刷の該当する文字・記号に“ Δ ”印を付け、余白に“ $\Delta = \blacksquare$ ”の“ \blacksquare ”の部分に修正する文字・記号を記し、指示する。
2.2	ルビの指示		
2.2.1	モノルビを指示する		<p>親文字に付くルビごとに“)”又は“へ”を付ける。</p> <p>記入例（左）及び修正結果（右）</p> <p>本の^{てん}天^ちと地^ち</p> <p>本の^{てん}天と^ち地</p>
2.2.2	グループルビを指示する		<p>親文字に付くルビ全体に“)”又は“へ”を付ける。</p> <p>記入例（左）及び修正結果（右）</p> <p>網点^{ドット}は</p> <p>ドットは</p>
2.2.3	熟語ルビを指示する		<p>熟語の各親文字に付くルビごとに“)”又は“へ”を付け、更に親文字に付くルビ全体に“)”又は“へ”を付ける。</p> <p>記入例（左）及び修正結果（右）</p> <p>背標^{せひよう}は</p> <p>せひようは</p>

番号	修正又は組版指定の内容	記号及び使い方	
		記号	使い方
2.3	空き量の指示		
2.3.1	ベタ組を指示する	ベタ	字間をベタ組にする場合は、“ベタ”と指示する。
2.3.2	全角アキを指示する	全角 □	全角と指示するか、正方形で示す。
2.3.3	二分アキ、三分アキ、四分アキ、二分四分アキなどを指示する	二分 三分 四分 二分四分	“分”の前に数字を付けて指示する。
2.3.4	2倍アキ、3倍アキ、4倍アキなどを指示する	2倍 3倍 4倍	“倍”の前に数字を付けて指示する。
2.3.5	空き量を均等割りにする		空ける記号又は詰める記号を付けて、“均等”と指示する。
2.4	行取り及びそろえの指示		
2.4.1	行取りを指示する	2行ドリ中央 2行ドリ 1行アキ	数字で行数を指示する。
2.4.2	そろえを指示する	上ソロエ 左ソロエ 下ソロエ 右ソロエ センター	行頭そろえは、縦組では“上ソロエ”，横組では“左ソロエ”，行末そろえは、縦組では“下ソロエ”，横組では“右ソロエ”と指示する。中央そろえは，“センター”と指示する。